

白山ふるさと文学賞

第十四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生5・6年 小説の部 最優秀賞

「私の夢見た魔法使い」

東明小学校六年

前川まえかわ

葵あおい

ジージー……ミンミン……

「あー！や、やばー！お母さんどうしよう。」朝から大騒ぎしているのはこの私、西山姫花と申します。大騒ぎしているその理由は、今日が夏休みの最終日なのに宿題が一つ残っているからです。その宿題の内容は「将来の夢」というものです。私の夢は魔法使いになることです。でも、夏休み前にクラスの子に言った時には、

「魔法使いなんてアホらしい」

と言われました。先生も、

「そんな仕事無いからなあ。」

と困ってしまいました。そして家族も

「もっと現実的な仕事にしたら？」

と言ってきました。

「何で、魔法使いを夢みたらダメなのかなあ？」

お母さんに聞くと、

「『魔法使い』という職業なんてないからねえ。」

と言われました。でも私は、諦めたくありませんでした。どれだけ考えても、他の仕事なんて興味が持てませんでした。

その晩、頭の中でぐるぐると夢のことを考え続けていました。私は神様にお願ひしました。「魔法使いになりたい！」と。丁度そのとき、振り子時計が九回鳴って、夜中の十二時をつげました。

七日後……

夕方の風を浴びて屋根の上でのんびりしていると、どんどん眠たくなってきました。うとうとしていると、ほほに冷たいモノがあたり、パチンと割れました。

「あれっ、シャボン玉が降ってきた。だれか近所の子があそんでいるのかなあ？」

しかし、突然ひときわ大きいシャボン玉が私を包み込みました。次の

瞬間、私は空に浮かんでいました。最初はびっくりしましたが、すぐに楽しくなってきました。

「わあ！！空を飛べる日が来るなんて！」

ワクワクして周りを見渡していると、目の前に魔女服を着たおばあさんが現れました。私は自分のほっぺたをギューっとつねりました。

「あつ、めっちゃ痛い。つてことは、夢じゃない。魔法使いは、本当にいるんだ!!」

私がシャボン玉の中で、喜んで大暴れしていると、

「そんなに大暴れしないでおくれ。シャボン玉が割れてしまうよ。」

と、おばあさんに言われてしまいました。

「す、すみません……」

そう私は言ったけど、心の中のワクワクを隠しきれませんでした。するとおばあさんが、

「あんだ、何でそんなにワクワクしているのかね？」

と、聞かれてしまいました。

「いやあ、魔法使いに会うのは夢だったので！」

と、ハキハキ言うとおばあさんが、大笑いしました。

「おまえは面白い子だねえ。気に入ったよ。さあ、行くよ！」と言われて、私はビックリしました。

「行くってどこへ!？」

「あつたり前じゃないか。魔法使いの修行だよ！」

「えええ!？」

私は心臓が止まるぐらいビックリしました。それと同時にワクワクする気持ちが爆発しました。

ヒューーン！ドスン！

「さあ、ついたよ！」

私は目が回ってしまって、すべてが歪んで見えました。しばらくする

と、ようやく周りが見えてきました。そこは、あたり一面不思議なモノに、囲まれていました。一部のモノにはタグが付いていて、『仲直り魔法の使い方』とか、『惚れ薬』とか『水晶玉占い』と書いてありました。たくさんある中に『なりたいものになれる魔法』だけが光って見えました。胸がドキンと高鳴りました。

「さーて！まずはどの魔法からいくとするかね？」

おばあさんが言うと、すかさず私は答えました。

「私はなりたいものになれる魔法がいい！」

「それは、上級魔法使いじゃないと使えんのよ。」

と言われてしまった。がっかりしたけど、魔法が使えるようになるならそれでOK。

「じゃあどんな魔法だったらできるの？」

と聞くと、

「そうだねえ、まずは、『思い出し魔法』からかねえ。」

と言われて

「初心者用魔法が決まっているなら、『どの魔法から行くとするかね？』って聞いた意味ないやんけー！」と私は思わず心の中で突っ込んでしまいました。そうとも知らず、おばあさんはどんどん教えてくれました。

「まず、思い出し魔法というのは、時間が経って忘れてしまった物事を思い出すことができるという魔法だ！呪文は、シンガネサ・メク・エルドだよ！さあ、そこにある魔法の杖を持って。よし、言ってみな！」私は、杖を持ちすぐに呪文を唱えました。

「シンガネサ・メク・エルド！」

すると、私が四年生の時に苦戦し、今でも超苦手な二桁割る二桁の筆算方法を思い出しました。呪文が成功して嬉しい半面、永遠に避けて通りたかった問題が頭に浮かび、しんどくくなりました。すると、心を読んだらしきおばあさんが、爆笑しながら「思い出せたならラッキー

ーじゃないか！テストのときには使っちゃあいけないよ。」

「えー！テストで使わずにいつ使っん！？」

そうぼやく私を見て、おばあさんはしばらく笑い続けていました。こうして私の魔法使い修行1回目が終わりました。

次の日、

「昨日のおさらいもちゃんとできたし、次は炎を杖先から出す魔法をしようか。」

とおばあさんが言いました。なんだか昨日よりも張り切っているように見えました。

「呪文はインセンチメント・ファイヤーだよ。炎の魔法はいろいろな場面でも便利に使えるよ。」

「あつ、この前みんなで花火をしたときに誰も火を持ってなくてこまったんだよね。更に、タバコを吸う人に借りようとしたけど、今は電子タバコの人が多いから、保護者も誰もライター持ってなくて大変だったんだあ。そんなときにこの魔法があれば…。」

「便利だけど、その分気をつけないといけないよ。ケガをすることやさせることがないようにね。」

私は、昨日の魔法で成功していたから、私には何でも出来るような気になつていて油断していました。そんなだから、

「インセンチメント・ファイヤー！」

呪文を言い間違えてしまいました。炎は出ず、私の顔面の目の前で、ポフツ！と大きな音がして煙が辺りを包み込みました。幸い、ケガはなかったけど、私の大事な前髪がチリチリになつてしまいました。

「だっ、大丈夫かい!？」

おばあさんは最初は心配していたけど、私にケガが無いことが分かるのと、私の顔を見て、大笑いしていました。「何でそんなに笑うのさあ」と思っただけど、鏡を見て真っ黒の顔とチリチリの前髪に自分でも笑っ

てしまいました。

三日目はすり傷を治す魔法でした。

「呪文はインファルミダ・バリンカ・バリオジェンだよ。」

「えーっ！？何！？早口言葉！？？」

昨日の失敗を思い出して、いきなりやってみずに、何度も呪文を言う練習をすることにしました。でも、舌を噛みまくって、言えた頃にはベロがジンジンしてました。

「インファルミダ・バリンカ・バリオジェン！」私は、魔法の杖をふりながらカッコよく言いました。しかし、けが人はいないので何も起こりませんでした。

「おばあさん、今コロナが流行っているけど、魔法で直せないの？それが出来たら、もしかかっても休まずにすぐに学校に行けるからいいなと思って。」

私はおばあさんに聞きました。するとおばあさんは

「それはいい考えだね。でも、何人もの魔法使いが研究しているんだけど、まだその魔法は完成していないんだよ。」

「そうなんだあ、残念。」

新しい魔法を研究して、生み出す人がいるなんて初めて知って、私はまたわくわくした気持ちが止まらなくなりました。

四日目、「今日は瞬間移動魔法だよ。これが出来るようになれば、

私がおぼろぎ迎えに行かなくても、自分でここに来ることが出来るようになるよ。がんばりなっ！呪文はアナク・ゾイケ・ダボダイだよ。」

「ハナクソ？？」

私は、何回聞いてもハナクソにしか聞こえなくて、面白すぎる呪文に笑いすぎてお腹が痛くなりました。

笑いがおさまらない私を見て、おばあさんは一人でティータイムに行

ってしまいました。二十分後、おばあさん戻ってきたころにはようやく笑わずに魔法を言えるようになっていました。

「アナク・ゾイケ・ダボダイ！」

魔法は成功し、私は自分の部屋にもどっていました。そして、もう一度魔法を唱えると、またおばあさんの家に辿り着きました。

「やったあ！これで行きたいところどこにでも行ける！」

「残念だけど、事前に魔法陣を描いたところにしか行けないからね。」すかさずおばあさんが言いました。

「なんだ、デイズニーランドに行きたかったのに。」

一瞬がっかりしたけど、今の私にはデイズニーよりも魔法修行の方が魅力的だから、そこまで落ち込んでいない自分に気がつきました。

こうして私の魔法使い修行は始まりました。毎日、暇さえあればおばあさんのところに行って修行していました。不思議とどんな大変なことでも辞めたいとは全く思いませんでした。

二学期に入って、終わっていない宿題「将来の夢」は、先生の配慮で出さなくても怒られませんでした。

修行を続けて二週間ほど経ったある日のこと、私が布団で寝ていると、シンデレラの夢を見ました。夜中の十二時に魔法がとけて、馬車

はかぼちゃんに戻り、馬もネズミに戻ってしまつた。そのとき、丁度柱の振り子時計が九回鳴って目が覚めました。私は魔法がとけて元通りの西山姫花に戻っているかと思っただけでドキドキしました。

「こんなことなら、ガラスの靴を履いておけばよかった。そうしたら、ハッピーエンドになったのに。」

私が独り言を言っていると、なぜかおばあさんが現れて、

「何を言っているんだい。あんたはシンデレラじゃなくて、シンデレラにガラスの靴を履かしてやる魔女じゃないかい。誰かが何とかしてくれるなんて思っちゃいけないよ。魔法使いは『人のために』と思っ

て修行するんだよ。これまでにたくさん魔法使いを見てきたが、自分の利益のために頑張っていた子達は、みんないい魔法使いにはなれずじまいで辞めちまったよ。『人のために努力するのが一人前の魔法使い』なのさ」

「人のために？」

「そうさ。それが一番大事なのさ。」

私は、今までに自分が魔法使いになりたいと思っただけで、人の役に立つことなんかこれっぽっちも考えていませんでした。魔法使いは、自分の願いをかなえるものだど、ずっと思っていました。

「私の夢見た魔法使いは、みんなを幸せにする仕事だったんですね。」
私が言うと、おばあさんは嬉しそうに笑った。

九月も終わり、少しだけ冷たくなった風が教室を通り抜ける。放課後、私は先生のところへ行きました。

「先生、「将来の夢」の作文、遅くなってすみません。」

「ちゃんと書いてきたんだね。読ませてもらうね。」

先生は優しく微笑みました。

私の将来の夢

西山 姫花

私の将来の夢は、人の役に立つことです。これまでは、自分のことばかり考えて行動していました。すると、周りの大切な人たちを困らせたり、悲しませていることに気がつきました。

だから、家族や友達、会ったこともないような人まで、みんなを笑顔にできるような大人になりたいです。

こうして私が夢見た魔法使いになるための修行は続きます。みんなを幸せにするために努力できる、一人前の魔法使いになるために。そ

して、いつか魔法使いがみんなから認められる社会になるようにするために。

